

平成30年度 普及のあゆみ



平成31年3月

熊毛支庁屋久島事務所農林普及課
鹿児島県熊毛郡屋久島町安房650番地
TEL 0997-46-2236
FAX 0997-46-3384

は じ め に

屋久島の農業・農村を取り巻く情勢は、農業従事者の減少や高齢化の進行、それに伴う耕作放棄地の増加、消費者の食の安心・安全に対する関心の高まりと消費動向の変化など多くの課題に直面しています。

このような中、本県では、平成30年3月に策定された「かごしま未来創造ビジョン」や「かごしまの食と農の県民条例に基づく基本方針」の実現に向け、普及指導員の機能発揮により普及指導活動の高度化・効率化を一層推進し、「農業を支える人材の確保・育成」、「地域の特性を生かした農畜産業の生産体制づくり」、「I o T・A Iなどを活用したスマート農業への挑戦」、「ブランド力向上や6次産業化を通じた付加価値の向上」、「攻めの農業の実現に向けた輸出拡大」、「中山間地域農業の振興」のこれら6つの取組に対する支援を強化しているところです。

屋久島事務所農林普及課農業普及係では、これらを踏まえ、地域農業のめざすべき姿を長期的に展望し、7つの普及課題を設定し、関係機関・団体等と連携して農業者とともに地域課題の解決に向けて活動を展開してきました。

この度、これらの活動の経過や成果並びに実証・展示ほの成績を「普及のあゆみ」としてまとめました。今後、地域農業の振興や、地域農業を担う個別経営体や組織の育成に活用いただければ幸いです。

終わりに、実証・展示ほの設置等にご協力いただきました農業者の方々、普及指導活動を展開するにあたり、ご支援・ご協力いただきました指導農業士をはじめ普及指導協力委員の方々、屋久島町、屋久島町農業委員会、種子屋久農業協同組合等関係機関・団体の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成31年3月

屋久島事務所農林普及課
課長 宮下 浩秋

目 次

I 普及活動事例

- 1 屋久島農業を担う人材の確保・育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 地域の特性を活かした畑作農家の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 3 たんかん・ぼんかん栽培農家の経営安定・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 4 屋久島の特性を活かした茶産地づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 5 生産性の高い肉用牛経営の確立・推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 6 持続的な地域農業の推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 7 屋久島の農林水産物を活かした地産地消ビジネスの推進・・・・・・・・ 13

II 実証・展示ほ等成績

- 1 さつまいも緩効性肥料（かんしょ100）の実証・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 2 ターム水溶剤を活用した夏秋梢抑制の検討・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 3 収益性を意識した更新体系確立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- 4 牛舎屋根への石灰塗布による牛舎内温度への影響・・・・・・・・・・・・ 21

III 参考資料

- 1 平成30年の主要作物生育経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 2 平成30年の気象データ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- 3 ミニ情報でつづるこの1年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

I 普及活動事例

課題名 屋久島農業を担う人材の確保・育成

【成果の要約】

経営改善計画書の作成支援を行い、認定農業者76戸を確保できた。また、研究会活動等を通じて、たんかんの改植に向けた支援や茶の生産管理技術の改善等の成果を波及し、モデル農家9戸の経営改善と産地育成が図られた。女性農業者へは研修会等を通じた支援を行い、女性農業経営士2名が認定された。

1 対象

認定農業者77戸，屋久島町認定農業者連絡協議会1組織，屋久島町アグリネット44名，経営体育成支援対象者9名，研究会組織4組織，新規就農者10名，屋久島4Hクラブ8名，屋久島つわぶき会13名，しゃくなげ会12名

2 課題を取り上げた理由

屋久島町の認定農業者数は、基本構想の目標所得（320万円）を達成している農業者は少ない状況にあり、目標所得を達成できるよう経営改善の支援が必要である。また、将来の担い手を確保するため、新規就農者を対象とした基礎研修会や部門研修等の充実を図り、新規就農者の定着を図る必要がある。また、4Hクラブや女性農業者組織等の活動を通じて、農村リーダーとしての資質向上・能力向上を支援する必要がある。

3 活動内容

(1) 認定農業者の育成確保

町担い手育成総合支援協議会と連携し、経営改善計画の作成支援を行なった。

(2) 地域農業を牽引するモデル経営体の育成

モデル経営体9戸に対して、経営改善計画（3か年）の作成支援，計画達成に向けた技術および経営の改善支援を行った。モデル経営体のうち1戸は、後継者就農と規模拡大に向け法人化等検討会を開催した。

4部門（焼酎用さつまいも，果樹，茶，畜産）の研究会で，実証ほの設置や現地検討会等を開催し，産地育成の支援を行った。

経営研修会や簿記研修会等を通して，家族経営協定および複式簿記記帳を推進した。



〈法人化等検討会〉

(3) 新規就農者及び青年農業者の確保育成

新規就農者励ましの会や現地就農トレーナーと連携した基礎研修及び部門別研修会を開催し，新規就農者の定着を支援した。

屋久島4Hクラブ員のプロジェクト活動を支援し，地区青年農業者会議における主体的な発表を支援した。



〈新規就農基礎研修会〉

(4) 農村女性の農業経営等参画推進

女性認定農業者、しゃくなげ会（若手女性農業者組織）に対し、女性農業経営士養成研修や“屋久島食の文化祭”，各種研修会等へ参加誘導を行った。

4 活動の成果

(1) 認定農業者の育成確保

高齢化等による再認定辞退があったが、新規認定もあり、76戸の認定農業者を確保することができた。



〈若手女性農業者巡回〉

(2) 地域農業を牽引するモデル経営体の育成

モデル経営体9戸の経営改善目標の達成レベルに差はあるが、支援活動を通じて技術の向上，経営面積の拡大等の成果が得られた。モデル経営体のうち1戸は、法人化に向けて検討している。

研究会活動を通じて、さつまいもの苗供給システムの構築，たんかの改植面積の拡大，茶の技術マニュアルの波及，規模拡大による繁殖雌牛頭数の増加等の成果が得られ，産地育成に寄与できた。

認定農業者申請に伴い，新規に2戸で家族経営協定が締結された。また，複式簿記記帳農家数も増加した。



〈家族経営協定の締結〉

(3) 新規就農者及び青年農業者の確保育成

新規就農者は，給付金を受給している農家も多く，目標所得を確保できている農家は少ない。今後も継続的な支援を行う必要がある。青年農業者のプロジェクト活動は自主的な活動ができており，8名全員が地区青年会議で発表した。



〈青年農業者会議〉

(4) 農村女性の農業経営等参画推進

女性農業委員2名が新たに女性農業経営士として認定され，パソコン簿記研修等の各種研修会にも積極的に参画している。

5 今後の課題

- (1) 認定農業者の確保及び継続した経営改善支援
- (2) 新規就農者の確保定着及びプロジェクト活動の活性化支援
- (3) 主体的に経営に参画する女性農業者の育成確保

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇蛸原，木下，真正，濱上，東原

課題名 地域の特性を活かした畑作農家の育成

【成果の要約】

焼酎用さつまいの苗供給システムは2年目となり、苗の生産計画や育苗技術改善等、苗の安定供給を支援した。

ソロヤムは、良質たね芋の供給により生産安定が図られた。

ばれいしょは、低pH生育障害やそうか病の発生は減少しているが、疫病の発生が増加傾向となり課題が残った。

1 対象

畑作農家46戸、畑作研究会7戸、焼酎用さつまいも農家15戸、
ソロヤム増収対策協議会19戸、JA野菜部会ばれいしょ栽培農家17戸

2 課題を取り上げた理由

畑作農家の拡大を図り、実需者のニーズに対応し、継続出荷できる体制を確立する必要があるが、担い手となる畑作農家が少ない。南部地区を中心に基盤整備が進んでおり、畑作農家の育成が必要である。

3 活動内容

(1) 畑作営農の支援体制の強化

技連農産園芸部会を中心に、それぞれの品目の抱える課題及び支援策について、関係機関（町、JA、農林普及課）で対策を検討した。また、県園芸振興協議会本部との支部連携会議で、ばれいしょの疫病対策等、重点品目の生産対策について協議した。



〈園振協支部連携会議〉

(2) 畑作物の生産性向上

ア 苗供給システムの充実（焼酎用さつまいも）

屋久島町農業管理センターの苗供給が2年目となり、苗の生産計画や育苗技術改善等、苗の安定供給を支援した。

イ 島内種芋供給体制の検討（ソロヤム）

農業開発総合センター熊毛支場と連携し優良種苗の供給を行っており、種いもほ場の単収向上について指導した。

また、坪掘り調査を実施し、出荷予測の支援を行った。

ウ 低収要因対策の実施（ばれいしょ）

特殊肥料を活用したそうか病実証ほを設置し、防除対策を検討した。また、土壌分析を行い、低pHほ場の改善指導を行った。疫病については、発生予測をたて防除指導を行った。



〈農業管理センターハウス〉



〈ソロヤム出荷予測調査〉

4 活動の成果

(1) 焼酎営農の支援体制の強化

焼酎用さつまいもの苗供給体制については地域に定着したが、さらに安定供給を図る必要がある。排水対策として導入したハーフソイラーは、効果の確認が難しいこともあることから利用面積が伸び悩んでおり、関係機関と協議して利用促進を図る必要がある。

(2) 畑作物の生産性向上

ア 苗供給システムの充実（焼酎用さつまいも）

13万本の供給を計画していたが、低温で苗の伸長が劣ったこと、苗の供給希望時期が4～5月上旬に集中し10万本の供給となり安定供給ができなかった。

イ 島内種芋供給体制の検討（ソロヤム）

排水対策等を行う、概ね生育は良かったが目標単収は確保出来なかった。栽培面積が減少しているため次年度の必要種芋量は確保できた。

ウ 低収要因対策の実施（ばれいしょ）

特殊肥料を利用した実証ほは、そうか病の発生が少なく普及性があると思われた。

また、疫病については、年内の気温が高く、初期防除の指導を行ったが、防除が遅れたほ場では疫病の発生を抑えることができなかった。

5 今後の課題

(1) 焼酎用さつまいも

安定供給を図るため、育苗面積は増やす必要があるが、苗伝搬による病害の発生が増えており病害対策を行う必要がある。

(2) ソロヤム

将来的に原種を地元で生産する体制を検討する必要がある。

(3) ばれいしょ

近年、温暖化等の影響で気温が高いため、種芋の産地や植え付け時期を見直す必要がある。

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇蛸原

課題名 たんかん・ぼんかん栽培農家の経営安定

【成果の要約】

トロイヤースイトレンジ台たんかんの安定供給に向け検討会を開催し、今後3か年の果樹苗木需要調査を行った。

若手果樹生産者の技術・経営改善として、たんかんの夏秋梢処理省力化技術を検討し、夏秋梢の発生を3～26%に抑制する効果が確認できた。

1 対象

果樹栽培農家353戸、JA果樹部会221戸、果樹研究会19戸、ACCY5人

2 課題を取り上げた理由

屋久島では、たんかん、ぼんかん主体の果樹経営が行われているが、贈答需要の減少や嗜好性の多様化等により市場単価は低下傾向が続いている。また、様々な高糖系中晩柑類など産地間競争が激しくなっている。このような中、果樹農家の経営安定には省力化機械導入や生産性の低い老木の改植に向けた取組が必要である。また、生産者、関係機関・団体が連携を密にし、産地課題の解決を図る必要がある。

3 活動内容

(1) 果樹産地再編

生産性の低い老木からの改植の推進を、関係機関と連携して取り組んだ。また、省力化や規模拡大を図るため、改植時の園内整備についての考え方や、苗木の植栽方法について幼木管理研修会を開催した。また、トロイヤースイトレンジ台たんかんの安定供給に向けて、検討会を開催した。

(2) 産地力の維持

果樹生産組織を対象に病害虫防除や栽培管理などについて、各研修会や講習会で指導した。また、月1回発行するフルーツ情報を通じて基本管理の徹底について情報提供した。

(3) 若手果樹生産者への支援強化

果樹若手生産者を対象に、技術や資質向上を図るため屋久島地区指導農業士会と連携して研修会を実施した。また、省力化技術実践によるコスト低減の検討を行った。

4 活動の成果

(1) 果樹産地再編

関係機関と連携した推進の結果、個人の一部改植は116名が3,291本（面積換算4.7ha）、果樹経営支援対策事業を活用して3名が0.8ha改植し、改植面積は合計5.5haとなった。

幼木管理研修会では、他産地の先進事例紹介や、島内の園内整備の優良事例園で研修し、SS体系の植栽方法や、軽トラックが入っていきける園内道の整備について熱心な意見交換ができた。



〈幼木管理研修会〉

また、屋久島ではトロイヤートレンジ台たんかんの導入が平成29年度から始まっており、今後の苗木の安定供給に向け、県園振協本部と連携して生産者代表との検討会を開催した。会では、今後の苗木供給の動向や、トロイヤートレンジ台たんかん栽培上の留意点等について検討が行われた。また、JA果樹部会や各個販グループと連携し、苗木の安定確保に向け、今後3カ年の需要調査を行った。



〈たんかん苗木供給検討会〉

(2)産地力の維持

フルーツ情報は、図表を増やし読みやすい紙面に工夫し、個人販売グループでは研修会に活用した。

各出荷グループの研修会では、病害虫防除や栽培管理について研修を行った。また、樹高が高くなっているぽんかんの低樹高化の現地検討を行い、技術の波及に取り組んだ。



〈低樹高化の現地検討〉

(3)若手果樹生産者への支援強化

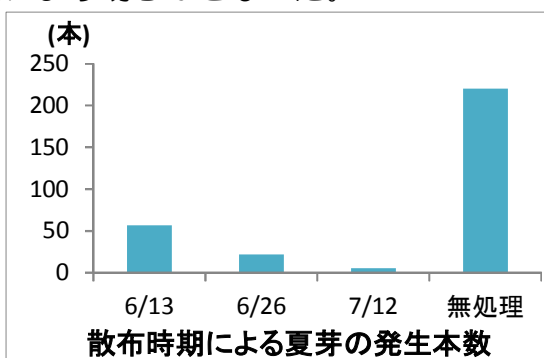
技術や資質向上を図るため、現地就農トレーナー研修を実施し、病害虫防除や栽培管理、消費者に好まれている中晩柑類の品種の試食検討等を行った。

また、屋久島のぽんかん、たんかん栽培において労力面で課題となっている夏秋梢処理の省力化対策として、植調剤の活用を検討した。

たんかんでは、散布時期を6月13日、6月26日、7月12日に分けて試験したが、それぞれで夏秋梢の発生を3～26%に抑制する効果が確認できた。また、植調剤の活用技術はコスト低減になることが経営的な評価により明らかとなった。



〈現地就農トレーナー研修〉



5 今後の課題

- (1)改植後の早期成園化
- (2)若手果樹生産者の経営確立支援

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇濱上



〈植調剤活用実証試験の状況〉

課題名 屋久島の特性を活かした茶産地づくり

【成果の要約】

本年産一番茶は厳しい相場であったため、収量重視の生産体制で対処した。改訂した「茶園更新マニュアル」を活用し、昨年度から実践支援したことから、摘採時期を遅らせても品質は高いレベルで維持できた。

1 対象

屋久島町茶業振興会21戸

2 課題を取り上げた理由

生産者は、高齢化等により減少傾向にあるものの、茶園の流動化や耕作放棄地を活用した新植等により、茶栽培面積は増加傾向にある。荒茶価格は、リーフ茶の消費減退等により市場単価が低迷している中、走り新茶産地として、特に一番茶については、深蒸しや若芽摘採による高品質茶生産が定着し、流通関係者から高い評価を受けている。さらなる生産基盤強化を目指し、消費者の安全・安心志向の高まりに配慮しつつ、生産管理技術の向上等を通して、茶生産者の経営安定を図る必要がある。

3 活動内容

(1) 生産基盤の強化

ア 優良品種等への新・改植の推進

若手経営者について、生活設計まで含めた長期経営計画作成を支援した。また、新・改植を後押しするため、挿し木繁殖を検討した。

(2) 生産管理技術の向上

ア 高品質茶生産技術の高度平準化

昨年度改訂した「茶園更新マニュアル」の実践支援を行った。また、本マニュアルを経営面積全体に落とし込み、毎年高い水準で収量・品質を維持するため、体系化の実証試験を行った。

イ 有機茶栽培の収量・品質向上検討

有機茶栽培農家を対象に、深蒸し茶製造指導や輸出商談用シートの作成支援を行った。また、有機転換志向農家の組織化を誘導した。

(3) 安心・安全なクリーンな茶づくりの推進

ア 第三者認証制度の推進

K-GAP認証の新規取得者へ運営支援を行った。また、JGAP認証からASIAGAP認証へ変更を目指す生産組合を対象に、施肥・防除体系の見直し支援を行った。



<茶と露地野菜の複合経営研修>

4 活動の成果

(1) 生産基盤の強化

長期経営計画作成支援農家は、目標値が明確になったことで、農作業等が計画通り着実に実践できるようになるなど、行動に大きな変化がみられる。また、上記農家は規模拡大を目指しており、農閑期の収入確保や年間雇用等を考慮し、焼酎用さつまいもとの複合経営に取り組むことになった。

挿し木は夏挿しと秋挿しを検討した。挿し木床はポリエチレンフィルムでトンネル式に被覆し密封するため、夏挿しは高温になり生育が優れなかった（10月時点生存率71%）。一方、秋挿しは3月時点で約90%と高い生存率であった。秋期は茶園管理が一段落する時期で導入しやすいと考えられた。屋久島町は輸送コストがかかり苗木購入費が高く、また、小売り茶用などに在来種など特徴のある品種を導入したいなど、自家用挿し木繁殖への期待は高い。



<挿し木床設置>

(2) 生産管理技術の向上

一番茶平均単価は過去6年間で最低（前年比61%）であったが、増収により粗収益は過去6カ年比110%であった。マニュアルに基づき、芽数型仕立てから芽重型仕立てに茶園づくりを変更したことで、適期幅が長くなり、摘採時期を遅らせても品質を維持できた。また、有機転換志向農家を含む4戸で、8ha以上の有機団地化を目指し部会を設立した。



<一番茶互評会>



<現地研修会>



<病害虫防除研修会>

(3) 安心・安全なクリーンな茶づくりの推進

K-GAP認証の新規取得者は、1年間の運用で課題を抽出し、生産工程管理の見直しを行うことができた。また、ASIAGAP認証取得者は、記帳書類から施肥・防除時期等を見直すことができ、次年度はより効果的・低コストな茶園管理が期待できる。

5 今後の課題

(1) 生産基盤の強化

複合経営は年間作業の体系化や収益性を評価し、適正規模を検討する必要がある。

(2) 生産管理技術の向上

平成32年度以降に、屋久島東部の茶園を中心に畑地かんがい整備が計画されている。水の多目的利用（かん水、害虫防除等）が期待されているが、水量に限りがあるため、技術実証や水利用ルール作成が必要である。

(3) 安心・安全なクリーンな茶づくりの推進

生産工程管理の課題を抽出し、レベルの高度化を支援したい。

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇眞正

課題名 生産性の高い肉用牛経営の確立・推進

【成果の要約】

経営改善計画に沿った規模拡大を実践する中、発育調査や繁殖成績のデータをもとに、子牛哺育期の飼養管理改善・繁殖成績の向上に取り組み、繁殖雌牛頭数は屋久島全体で490頭（規模拡大支援農家は19頭増加）となり、子牛の市場価格比（屋久島／種子島市場）は106%であった。しかしながら、飼料作付面積は横ばいであり、今後は遊休農地を活用した放牧体系による飼料自給率の向上に取り組む必要がある。

1 対象

屋久島町和牛振興会16戸，屋久島和牛研究会9戸，口永良部島肉用牛農家3戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島の肉用牛農家は、高齢化が進む中、飼養戸数・頭数ともに減少傾向にあり、産地規模の維持を図るには、経営基盤の強化と生産技術の高位平準化が必要である。また、増頭意欲が高い農家に対し、経営改善計画の検討・実践を支援し、農家間に差のある技術の高位平準化を図る必要がある。

3 活動内容

(1) 産地規模の維持

ア 拡大志向農家の増頭実践支援

規模拡大の実践に向け、長期経営計画の定期的な見直しや施設および飼養管理の改善、優良雌牛の保留や育成を支援した。また、子牛せり市場での発育調査結果をもとにした巡回指導や規模拡大および生産率の向上の重要性について研修会を開催した。

(2) 繁殖成績の向上

ア 受胎率の維持・向上

繁殖成績をもとに、発情発見資材による、受胎・未受胎牛の区別を明確化するなど、観察効率の向上と発情観察の徹底を指導した。

(3) 子牛の商品性向上

ア キャトルセンター預入までの発育の改善

預入時に、各農家の子牛発育調査を実施し、調査結果をもとに課題抽出と飼養管理改善を指導した。

イ 子牛哺育管理の改善

町技連会畜産部会で指導班（JA・町・普及）を組織し、重点指導農家2戸を定期的に巡回指導した。

(4) 自給飼料等の確保利用

ア 飼料作物の優良品種の実証

実証ほを設置し、飼料作付面積の拡大を検討した。



〈飼料作物実証ほ調査〉

4 活動の成果

(1) 産地規模の維持

経営計画を作成した4戸は規模拡大が進み、目標比113%（繁殖牛206頭）となり、屋久島全体の子牛販売頭数は13頭増の378頭となった。また、研修会を通して、更なる規模拡大や法人化の意欲が湧いている。



〈和牛振興会研修会〉

(2) 繁殖成績の向上

分娩間隔は375日で昨年より6日短くなった。資材の活用は、放牧を行う肉用牛農家が多い屋久島では有効と思われた。しかしながら、初回発情日が遅い農家もみられ、子牛の哺育管理を自然哺乳から制限・人工哺乳に誘導し、改善を指導した。



〈発情発見資材の活用〉

(3) 子牛の商品性向上

子牛の発育を数値化することで、各農家の育成技術が明確化できた。飼料給与量の改善やのこくず利用による環境改善により、キャトルセンター子牛預入時の日齢体重の発育標準値平均以上割合は85%から86%へ改善された。しかし、疾病発生も散見され、衛生管理が必要である。子牛市場価格比は106%となった。

(4) 自給飼料等の確保利用

優良品種（イタリアンライグラス「はやまき18」「きららワセ」）は既存品種より収量が多く、病害はみられなかった。しかしながら、1筆あたりの飼料畑面積が狭く、大型機械の導入もないため、飼料作付面積の増加は難しいと考えられた。



〈重点巡回指導〉

5 今後の課題

(1) 産地規模の維持

規模拡大志向農家が増えており、経営改善計画の作成支援や町営牧場を活用した規模拡大の支援が必要である。

(2) 繁殖成績・子牛の商品性向上

繁殖技術や子牛哺育・育成管理技術は農家間での差が大きく、子牛哺育方法等の実践を指導し、技術の高位平準化を図る必要がある。

(3) 自給飼料等の確保利用

遊休農地を活用した放牧体系による飼料自給率の向上で、経営コストの低減による所得確保を図る必要がある。

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇東原

課題名 持続的な地域農業の推進

【成果の要約】

原地区で検討してきた今後の地域農業をテーマにしたワークショップ結果をもとに、地区の営農ビジョンをつくる方向性ができた。ビジョンのとりまとめに向けて、検討委員を選定し、営農ビジョン（案）及び行動計画（案）を検討し、地域全体でもビジョン（案）について検討した。

1 対象

管内全集落 24地区，原地区12戸

2 課題を取り上げた理由

高齢化の進行，担い手農家の減少とともに樹園地をはじめとする農地の荒廃がすすみつつある。そこで，関係機関団体と連携を図り，一体となって地域ぐるみで地域営農のあり方に向けた検討と仕組みづくりについて，農地中間管理事業の活用や人・農地プランの検討等を通してすすめていく必要がある。

3 活動内容

(1) 集落営農等の推進

ア 推進地区の話し合い活動支援

関係者（支庁・町・農業委員会・農林普及課）で「人・農地プラン」の作成に向けた検討会を実施し，推進方法等意識統一を図った。

(2) 地域農業を支えるモデル集落営農の育成

ア 新たなモデル集落の育成

昨年度，原地区で実施した地域営農に関するワークショップ等の結果をもとに，営農ビジョン（案）及び行動計画（案）の作成を支援した。ビジョン作成については，原園芸組合より推進メンバー8名を選定し，関係機関を交え，4回にわたり，営農ビジョン（案）及び行動計画（案）の検討を行った。ビジョン（案）は，原園芸組合新春研修会で，3班に分かれ，全体検討を行った。



〈検討委員でビジョン（案）を検討〉



〈営農組合研修会で全体検討〉



<営農ビジョン(案)>

4 活動の成果

(1) 集落営農等の推進

ア 推進地区の話し合い活動支援

新規で平内地区、見直しで中間地区のプランが作成された。プランの未作成地区は取り組みが弱かったため、関係者(支庁・町・農業委員会・農林普及課)でプランの作成にむけた検討会を実施し、推進方法等意識統一を図った。プランの新規作成や見直しには至らなかったが、農地中間管理事業に取り組む地区が、新たに3地区あった。

(2) 地域農業を支えるモデル集落営農の育成

ア モデル地区における農地利用の検討

昨年度実施したワークショップ結果を原園芸組合総会で報告し、ビジョン作成に向けた意識の統一が図られた。ビジョン作成については、原園芸組合が検討メンバーを選定し、営農ビジョン(案)及び行動計画(案)を検討できた。ビジョンを地域全体で検討したことで、将来の地域営農についての課題の明確化とビジョン内容について意識の共有が図られた。

5 今後の課題

(1) 集落営農等の推進

集落の話し合い活動支援

(2) 地域農業を支えるモデル集落営農の育成

原地区営農ビジョン及び行動計画のとりまとめ、実施

6 担当した普及職員(〇はチーフ)

〇木下, 蛭原, 眞正, 濱上, 東原

課題名 屋久島の農林水産物を活かした食育・地産地消ビジネスの推進

【成果の要約】

農産物に付加価値をつけた商品づくりにむけて、「屋久島自然の恵み販売拡大協議会」を核に関係機関や関係者と連携を図り、専門家を招聘し、計画的にセミナーを実施し、商品開発や販路拡大に取り組んだ。

1 対象

女性起業・農産加工グループ3G、6次産業化農家及び志向農家16戸

2 課題を取り上げた理由

平成24年度以降、3戸の農業者が6次産業化・地産地消法に基づく総合化計画の認定を受けた。平成27年度から地域振興推進事業を活用し、6次産業化に取り組むための専門的な知識・技術、手法、情報提供等の支援に取り組んできている。

今後、それらの活動の支援をするとともに、屋久島の恵み（屋久島の農林水産物・加工品）の販売を拡大するため、地域が一体となって取り組む体制を整える必要がある。

3 活動内容

(1) 農産物に付加価値をつけた商品づくりの支援

ア 6次産業化農家等の経営発展支援

屋久島自然の恵み販売拡大協議会と連携し、支援を進めるとともに、6次化推進状況について聞き取り調査を実施した。販売拡大支援については、輸出商談会支援や特産品コンクール等情報提供を行った。また、加工に取り組む新規就農者については、経営計画作成支援を行うとともに、6次化プランナーによる加工技術相談を行った。

イ 6次産業化に向けた基本知識技術の習得支援

商品開発を目指した基礎加工技術研修や食品表示、インターネットを活用した情報発信・販売拡大について専門家を招き、商品性の向上、販売拡大について支援した。また、個別相談会を開催し、個別課題を整理し、支援を行った。

表 研修会の開催状況

	研修会名等	参加者数
8/23	食品表示・GAP研修会	23名
10/11	インターネット情報発信・販売拡大研修会	25名
11/13	6次産業化個別相談会	相談2件
1/24	農産加工基礎研修会	22名
1/24~25	6次産業化個別相談会	相談4件



〈インターネット情報発信・
販売拡大研修会〉



〈農産加工基礎研修会〉

4 活動の成果

(1) 農産物に付加価値をつけた商品づくりの支援 ア 6次産業化農家等の経営発展支援

屋久島自然の恵み販売拡大協議会と連携し支援を進めるとともに、6次産業化の取り組み農家への聞き取り調査を実施し、課題を整理した。島外への販路拡大支援については、各種商談会の出店支援や特産品コンクール等情報提を行うとともに、インターネット販売についての仕組みや今後の展望等について専門家から情報収集を行った。



〈個別相談会〉

また、加工に取り組む新規就農者については、経営計画作成支援を行うとともに、6次化プランナーによる加工技術相談を実施し、商品性の向上支援を行った。

イ 6次産業化に向けた基本知識技術の習得支援

商品の付加価値向上支援として、食品表示、GAPについて研修を実施し、表示の適正化についての関心が高まった。6次産業化プランナーを交えた農産加工基礎研修については、今後必要となるHACCPの考え方を取り入れた加工体制の必要性について認識が高まった。

5 今後の課題

(1) 農産物に付加価値をつけた商品づくりの支援 商品性向上に向けた専門家との連携・個別支援 販路拡大に向けた方策の検討・実施

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇木下

Ⅱ 実証・展示ほ等成績

課題名 さつまいも緩効性肥料（かんしょ100）の実証

【成果の要約】

かんしょ100は、からいも配合より2割程度増収するが、個数が増えるタイプの増収であり1個重はやや小さくなった。1年だけの肥料試験であるので継続して実証を行いたい。

1 目的

屋久島の焼酎用さつまいもは収穫時期が1月であり生育期間が長いため、生育後半は肥料不足が考えられる。そこで、従来より肥効の長い緩効性肥料（かんしょ100）を用いた場合の収量性について検討する。

2 実証・展示ほの概要

(1)設置場所及び担当農家
原地区 安藤清浩 氏

(2)設置の概要

作 式：畦幅1.1m，株間40cm（栽植本数2,200本/10a），黒マルチ

移植日：平成30年4月10日

品 種：コガネセンガン

試験区の構成

区 名	肥 料 名	備 考
慣行区	かんしょ100 80kg ようりん40kg	N:P:K=6.4:14.4:16
実証区	からいも配合 80kg ようりん40kg	N:P:K=6.4:14.4:19.2

注)

かんしょ100 成分 N:P:K=8%:12%:20%
(LPタイプは100で全窒素に対して30%)

からいも配合 成分 N:P:K=8%:12%:24%

3 調査結果等

(1)生育経過

梅雨明け頃までは、概ね順調な生育であったが8月頃から、基腐病（仮称）による茎葉の枯死が見られ、収穫調査時の12月には約3割のいもに腐敗が認められた。



← →
からいも配合 かんしょ100

(2) 収量調査

区名	1株当総いも数	1株当上いも個数	平均1個重	上いも1個重
慣行区	5.3個	4.9個	342g	365g
実証区	7.7個	6.5個	280g	322g
慣行対比	145%	132%	81%	88%

注 上いもは1個100g以上とした。

調査日 平成30年12月14日（1区20株調査：健全株だけを調査）

区名	単位 kg/a		
	総収量(A)	上いも収量(B)	上いも率(B/A, 重量)
慣行区	398	394	99%
実証区	475	461	97%
慣行対比	119%	117%	—



〈慣行区 からいも配合〉



〈実証区 かんしょ100〉

4 考察

- (1) 今回の調査は、病害の発生が著しかったため健全株だけで調査を行ない、病害が入らなかったと仮定した換算収量で比較した。
- (2) 1株当たりのいも個数は実証区（かんしょ100）が7.7個、慣行区が5.3個で慣行対比145%と多くなったが、100g以下の小さいいもの割合が16%と多く上いも率が慣行区より低下した。
- (3) a当たりの上いも収量は、実証区461kg、慣行区の394kgで慣行対比117%と増収したが、1個重が322gと慣行区365gより12%小さくなった。
- (4) 今回実証したかんしょ100は、慣行肥料のからいも配合と比較すると2割程度増収したが、個数が増えるタイプの増収となり平均1個重は小さくなった。
- (5) 本土ではかんしょ100はすでに普及しているが、1個あたりのいも重が増えることで増収している。気象条件や基腐病の影響もあると考えられるため、次年度も検討を行いたい。

5 普及性及び残された課題

1年1か所の肥料試験のデータがあるので、継続実証したい。

課題名 ターム水溶剤を活用した夏秋梢抑制の検討

【成果の要約】

夏秋梢発生枝数は、対照区に対して散布区は3～26%の発生数となった。果実品質への影響は果皮色，着色歩合，糖度，クエン酸は散布区と対照区で同等であったが，果実肥大は散布区がやや優れた。また，経営性を評価したところ，散布区はコスト低減が図られた。

1 目的

屋久島ではぼんかん，たんかんにおいて，病害の発生や翌年の着果安定のため夏秋梢の除去が行われている。夏秋梢の除去には多大な労力がかかっており，省力化が求められている。

そこで，植物生長調整剤のターム水溶剤（1-ナフタレン酢酸ナトリウム水溶剤）を活用した，夏秋梢の発生抑制効果を検討する。

2 実証・展示ほの概要

(1) 設置場所及び担当農家

麦生地区 大山貴史 氏

(2) 設置の概要

試験期間：平成30年6月～平成31年2月

試験樹：たんかん「垂水1号」各区3樹，計12樹

試験区：

処理内容	
6月13日散布区	ターム水溶剤(1000倍希釈)を6月13日に散布
6月26日散布区	// 6月26日に散布
7月12日散布区	// 7月12日に散布
対照区	無散布

作型は全て露地栽培，果実品質は各区15果（1樹5果）調査

散布は動噴で，葉から薬液がしたたり落ちる程度の量を散布した

調査項目：夏秋梢発生枝数，着果量，果径，果実品質（糖度，クエン酸，着色歩合，果皮色）

3 調査結果等

(1) 夏秋梢発生枝数

夏秋梢発生枝数は散布区6～57本，対照区220本で，対照区に対し散布区は3～26%の発生数で（表1，写真1），着果数は散布区62～83果，対照区103果であった。

表1 散布時期ごとの夏芽及び着果数（調査日：平成30年7月23日）

	夏芽数	（散布区/対照区）	着果数
6月13日散布区	57	26%	83
6月26日散布区	22	10%	62
7月12日散布区	6	3%	69
対照区	220	—	103



写真1 7月23日の夏秋梢の発生状況（左:対照区，右:ターム水溶剤散布区）

(2) 果実品質

横径は，散布区平均が74.8mm，対照区は68.4mm，糖度は散布区が10.2度，対照区が10.1度，クエン酸は散布区が0.77%，対照区が0.81%となった（表2）。

表2 果実品質 調査日：1月31日

	横径 (mm)	縦径 (mm)	果実重 (g)	果皮色	着色 歩合	糖度 (Brix)	クエン酸 (%)
6月13日散布区	74.5	66.0	197.9	6.4	9.9	10.2	0.74
6月26日散布区	75.8	65.7	209.4	6.0	10.0	10.7	0.74
7月12日散布区	74.1	64.5	191.8	6.1	10.0	9.8	0.82
散布区平均	74.8	65.4	199.7	6.2	10.0	10.2	0.77
対照区	68.4	62.1	155.3	6.0	9.9	10.1	0.81

(3) 経営性評価

労働時間，資材費等から経営性を評価し，散布区の経費低減が確認された（表3）。

表3 経営性評価

	夏秋梢処理（時間）	労賃（円）	資材費（円）	経費（円）
散布区平均	2.6	2,040	11,778	13,818
対照区	20.0	16,000	—	16,000

4 考察

- (1) 夏秋梢の発生は，7月12日散布区が最も少なく，6月26日，6月13日の順となった。散布区は対照区と比べて着果数が少なかったにもかかわらず，夏秋梢の発生が少なかったことから，ターム水溶剤の抑制効果によると考えられた。
- (2) 果皮色，着色歩合，糖度，クエン酸は散布区と対照区で同等であり，ターム水溶剤による果実品質への影響はないと考えられた。果実肥大は散布区がやや優れ，他の中晩柑類での試験事例と同様の傾向がみられた。

5 普及性及び残された課題

連年使用時の樹体への影響を調査するため，継続調査を行う。

課題名 収益性を意識した更新体系確立

【成果の要約】

二茶後更新を隔年とした体系化を検討した結果、三番茶までは摘採し、その後更新（最終摘採あり）または放任すると、年間収量は増加し、翌年に向けた茶園づくりも良好であった。なお、三番茶後更新または放任の判断基準は、樹高（翌年二番茶まで摘採可能か）と概ね6/20頃までに更新可能かが挙げられる。

1 目的

屋久島町では、収量確保を意識しつつ高品質を維持するため、連年更新技術の体系化に取り組んでいる。一方で、本体系は二番茶後に深刈更新するため三番茶を摘採できないデメリットがある。

ここでは、二番茶後更新は隔年とし、三番茶を摘採する場合のその後の茶園管理方法について検討する。

2 実証・展示ほの概要

(1) 設置場所及び担当農家

平野・永久保地区 日高要人 氏

(2) 設置の概要

表1 処理区の内容（前年二番茶後更新茶園）

区名	一番茶		二番茶		三番茶		最終(四茶)	秋整枝	年間摘採回数
	摘採	摘採	更新	摘採	更新	摘採	摘採		
二茶後更新	○	○	6/10	—	—	○(8/17)	○(10/22)	4	
三茶後更新+最終摘採あり	○	○	—	○	6/29	○(8/10)	○(10/28)	5	
三茶後更新+最終摘採なし	○	○	—	○	7/8	—	○(11/14)	4	
更新なし(四茶放任)	○	○	—	○(7/26)	—	—	○(10/30)	4	

* 二茶後更新は56cm高さ、三番茶後更新は77cm高さで実施

* 更新位置により作業強度は異なる（56cm：中度、77cm：軽度）

* 更新時期は6/20までを目安としているが、本年は三番茶が著しく遅れたため、三番茶後更新は高めの位置で実施した。なお、7/8更新園は、秋整枝までの積算温度300℃を確保できないため、最終摘採を実施しなかった。

(3) 調査項目

収量，秋整枝時の株面状況

3 調査結果等

- (1)三番茶収量は、更新なし（四茶放任）で倍程度多いが、秋整枝までの積算温度を考慮し、摘採を大幅に遅らせたためと考えられた（表2）。
- (2)更新園の四番茶は、園づくりの意味合いが強いため、収量がやや少ない（表2）。
- (3)秋整枝量は、三番茶更新後に最終摘採しないと少なかった。他は、秋整枝から前回摘採までの期間が長いほど多収であった（表2）。
- (4)三番茶以降の総収量は、更新なし（四茶放任）が最も多く、二番茶後更新が最も少なかった。三番茶後更新では、最終摘採ありが多かった（表2）。
- (5)秋整枝後茶株面は、三番茶後更新後に最終摘採しないと、屋久島における適正芽数の目安30芽/20cm枠を下回った。最終摘採しないことで芽の分化が進まず、枝数が少なくなったためと考えられた。樹勢の目安となる葉層は差がみられたが、各区10cm以上確保されていた（表3、写真1）。

表2 処理別収量 (kg/10a)

区名	三番茶	最終(四茶)	秋整枝	合計
二茶後更新	—	225.0	365.4	590.4
三茶後更新+最終摘採あり	301.9	161.9	532.3	996.1
三茶後更新+最終摘採なし	295.7	—	470.4	766.1
更新なし(四茶放任)	650.0	—	606.0	1256.0



表3 秋整枝後の茶株面状況

区名	20cm枠内		枝太 (mm)	葉層 (cm)
	越冬芽数	枝数		
二茶後更新	39.3	24.0	1.8	19.3
三茶後更新+最終摘採あり	40.3	28.0	1.7	10.0
三茶後更新+最終摘採なし	29.3	18.3	1.8	15.0
更新なし(四茶放任)	52.7	34.0	1.9	13.3



* 20cm枠内、葉層は3反復
* 枝太は20本平均

4 考察

更新は二番茶後が一般的だが、屋久島町は温暖で茶期が早いため、三番茶後でも可能である。一方で、更新から秋整枝までの間に整枝を入れることが必須であり、更新時期は最終摘採までの日数確保を考慮すると、6月20日までを限度とし、これ以降に更新する場合は、更新位置を高くする必要がある。

写真1 秋整枝後の茶株面
上:二茶後更新
中:三茶後更新+最終摘採なし
下:更新なし(四茶放任)

5 普及性及び残された課題

現地に波及済み。

課題名 牛舎屋根への石灰塗布による牛舎内温度への影響

【成果の要約】

牛舎屋根（スレート）へ石灰塗布した結果，大人2名で約3分/㎡の作業時間・負荷はかかるが，13円/㎡で日中の牛舎内温度を最大4.1℃下げることができた。しかしながら，塗布した石灰を乾燥させるため，天候が安定した期間に塗布する必要があり，とくに梅雨明け時に塗布することで夏場に最大限の効果が期待できると考えられた。

1 目的

肉用牛が快適に感じる温度は15～25℃と言われ，それ以上の温度になると暑熱ストレスによる食欲不振等が懸念され，生産性にも大きな影響を与える。屋久島町の平均気温は6～9月で25℃を上回っており，夏場の暑熱対策が求められている。

ここでは，牛舎屋根へ石灰塗布し，牛舎内温度へ及ぼす影響を調査する。

2 実証・展示ほの概要

(1) 設置場所及び担当農家

平内地区 西橋優樹 氏

(2) 設置の概要

処理内容：繁殖牛舎（スレート） 無処理区，石灰塗布区

処理時期：平成30年8月5日～8月11日（処理前後3日間を比較）

(3) 調査項目

単位面積あたり石灰投入量・コスト，作業時間，牛舎内温度

3 調査結果等

(1) 石灰は，ドロマイト系石灰（商品名：ホワイトD，1,520円/1袋20kg）を利用し，繁殖牛舎1棟480㎡に供試した（写真1）。

(2) 作業は，石灰：水＝1：3をバケツで攪拌し，動力噴霧器を用いて大人2名の作業で約3時間だった（約3分/㎡）（写真2，3）。

(3) 石灰投入量は，480㎡の屋根に80kg（0.2kg/㎡）で，コストは6,040円（13円/㎡）であった。

(4) 処理区の温度は，無処理区より1日平均1℃低く，日中は最大4.1℃低くなった（図1）。



写真1 供試した石灰



写真2 石灰塗布前



写真3 石灰塗布後

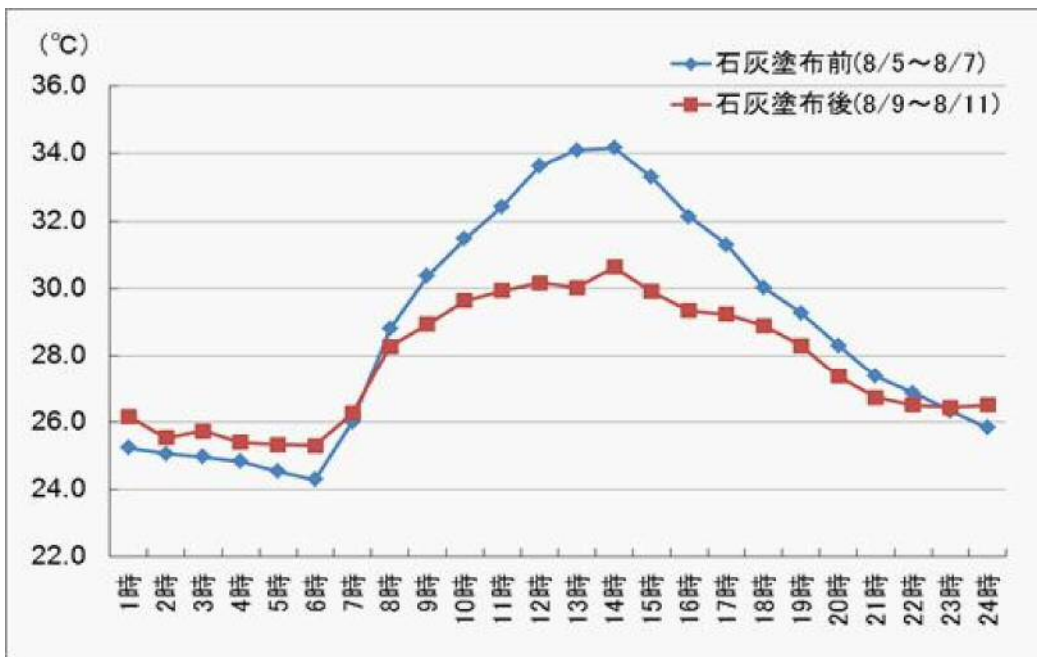


図1 牛舎内温度（3日間平均）の推移

4 考察

牛舎屋根へ石灰塗布した場合，作業時間・負荷はかかるが，低コストで牛舎内温度を下げる事ができた。しかしながら，石灰が乾燥する前に雨に濡れると流れてしまうため，天候が安定したタイミングで塗る必要がある。また，屋根を清掃した後に塗布することで，より粘着しやすくなると考えられる。

（農家の感想）

石灰塗布後は，特に日中は体感で3°C程低く感じた。梅雨明けすぐの晴れ間に塗布できれば，夏場に最大限の効果が期待できそう。屋根が汚れていた部分は剥がれやすく，今後は，よく清掃した後に塗布したい。

5 普及性及び残された課題

牛舎内温度の低下が生産性へ及ぼす影響。

III 參考資料

Ⅲ 参考資料

【平成30年の主要作物生育経過】

果 樹

【ぼんかん】

開花は、平年並みの4月17日に満開となり、着花量はやや少なく、最終的な着果量は平年並みとなった。

果実肥大は平年並みで、秋季に降水量が少なかったため糖度は平年よりやや高く、クエン酸は平年より低かった。

台風19号、24号の襲来により、小島～湯泊を中心に落果、島内全域で風傷果の被害が発生した。

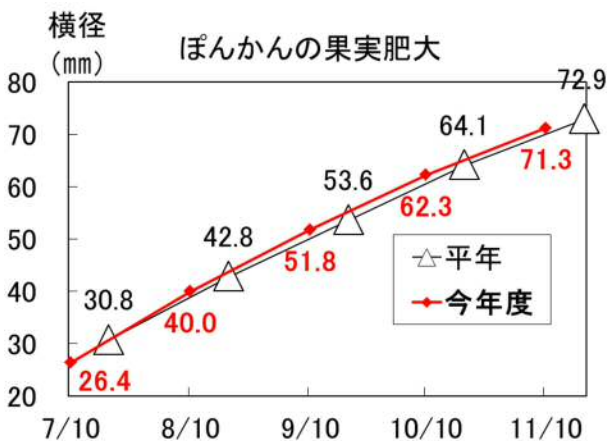
12月上旬～下旬の平均気温は平年より1～3℃高く、降雨もあったため、12月には水腐れが多く発生した。

【たんかん】

開花は、平年より3日遅い4月13日に満開となり、着花量が多いが直花主体で、最終的な着果量は平年並みとなった。

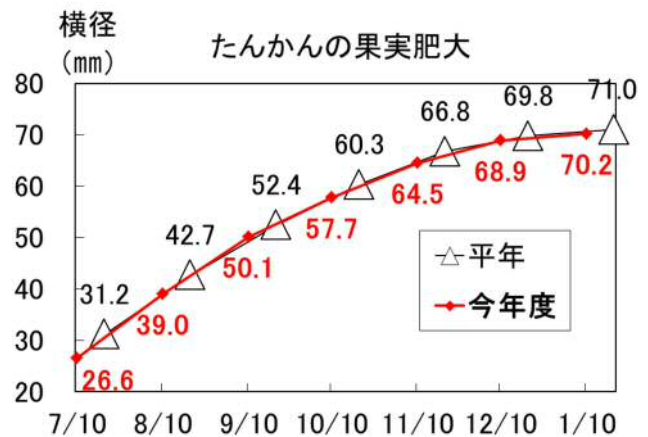
果実肥大は平年並みで、秋季に降水量が少なかったため糖度は平年よりやや高く、クエン酸は平年よりやや低かった。

台風19号、24号の襲来により、風傷果の被害が発生した。一方で、樹勢低下により果実の着色は平年並みか早くなった。



調査日：平成30年11月10日

	糖度	クエン酸
平成30年度	10.0	0.91
平年	9.8	1.14



調査日：平成31年1月10日

	糖度	クエン酸
平成30年度	10.3	0.90
平年	10.1	1.03

【口永良部新岳噴火による降灰の影響】

平成30年12月18日、平成31年1月17日、29日に口永良部島新岳で大規模な噴火があり、屋久島島内では降灰が確認された。12月18日、1月29日は永田で多量の降灰が確認され、1月17日は吉田で多量の降灰が確認された。

12月18日の降灰確認後には、町・JA・農林普及課で対応を協議し、動噴やスプリンクラー等で散水して、果実に付着した灰を除去するよう指導した。ぼんかんは、12月18日時点で収穫はほぼ終わっていたが、一部着果していた果実で果皮にヤケが発生した。たんかんは、永田地区で一部果皮のヤケが見られた。



果実への降灰(1/30永田)



たんかん果皮のヤケ



スプリンクラーによる散水

茶

一番茶は、2月下旬までの気温は平年より低く推移したが、3月に入り平年より高く推移したことから、新芽生育が早く、前年より15日早い3月28日摘採開始となった。生産期間は好天に恵まれ作柄は良好であったが、市況は前年に比べ引き合いが弱く、低調な取引展開であった。収量は、前年と比べ増加した。

二番茶は、摘採時期を遅らせ収量確保を優先したため、一番茶摘採後49日後の5月25日(前年-9日)の摘採開始となった。また、三番茶については、二番茶摘採後37日後の6月22日(前年-18日)から、四番茶については、三番茶摘採後32日後の7月24日(前年-16日)から摘採開始となった。三番茶以降も生育良好で、各茶期前年度より増収傾向であった。また、葉層確保を意識した茶園管理が定着し、良好な園層となっている。

病害の発生は全体的に少なかったが、害虫は二番茶期にチャノホソガ、夏場にチャトゲコナジラミが多発生した。

9月30日に大型の台風24号(瞬間最大風速44.8m/s, 積算雨量88mm:小瀬田)が通過し、県内各茶産地で影響を受けたが、幸いなことに屋久島町内茶園での被害はみられなかった。

野菜

【ばれいしょ】

年内の気温が高く推移したため、生育は徒長気味で疫病の発生も多かった。また、1月の低温・強風による茎葉の折損が一部に見られた。出荷は、平年より早い1月下旬より始まり、出荷量は平年並みの見込みである。

【やまいも】

4月末から5月上旬にかけて植付され、台風による軽度の茎葉の折損が見られたが、生育は概ね順調であった。出荷先メーカーの要請で栽培面積は1.5haとなり減少したため、出荷量は昨年より少ない25t前後が見込まれている。

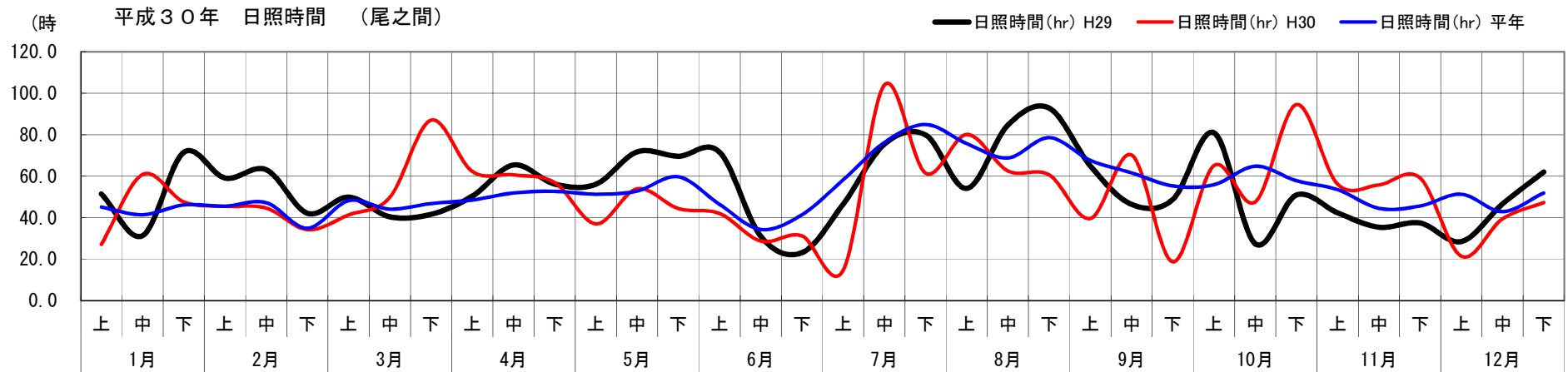
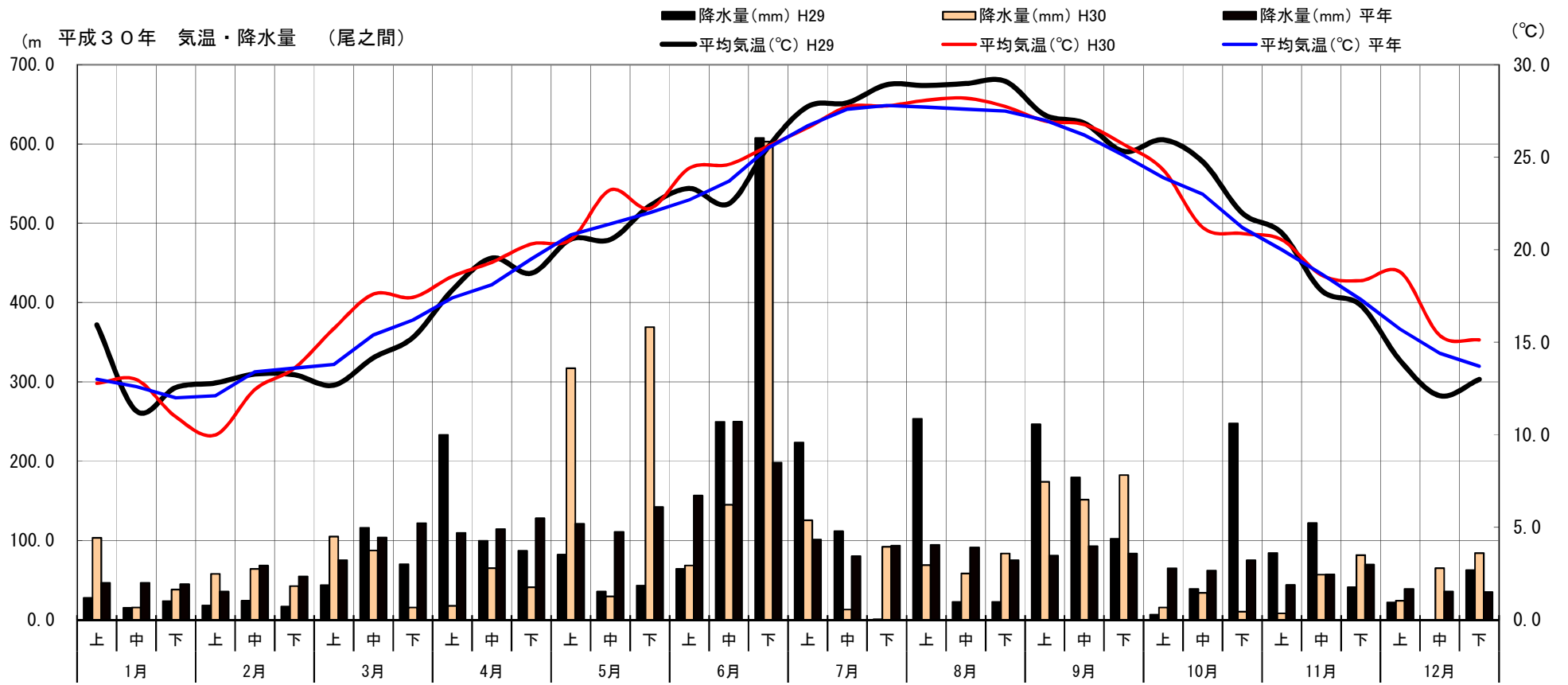
【さつまいも】

初期生育は概ね順調であったが、梅雨開け以降、糸状菌による新しい病害である基腐病(仮称)が発生し、地上部の枯死し芋の腐敗が多発した。従来のある割病と比較すると芋の腐敗が著しく、平年の5割程度の単収となり大きな減収穫量となった。

【実えんどう】

昨年、「ミナミグリーン」から「まめこぞう」に全面的に品種を更新し2年目の栽培となった。

台風の影響で、播種はやや遅れ10月中旬となった。初期生育は順調であったが、その後の気温が高く推移したため、モグリバエ類が多発し、生育も徒長気味となり2月中旬には芯止まりとなり出荷量は少なくなった。



【ミニ情報でつづるこの1年】

4月



＜平成30年産茶が生産開始＞

屋久島産一番茶が3月28日からスタートした。2月中旬以降、気温が高めで推移したため、前年に比べ16日（前々年より7日）早かった。好天に恵まれ良質の生産となっているが、リーフ茶需要減少の影響等により、厳しい相場展開となっている。生産者からは、「厳しい年は何度もあったが乗り越えてきた。経営の基礎となる茶園管理は妥協せずに取り組もう」と前向きな声が聞かれる。今後も、経営・生産両面から支援を継続したい。

＜屋久島生活研究グループ、がんばってます！＞

4月12日、屋久島事務所の会議室にて会員17名のうち10名が参加し、総会および研修会が開催された。研修会では、手作り料理を持ち寄り、各グループの活動状況を交換しながら交流を行った後、屋久島事務所職員を対象に展示・即売会を実施し、大変好評を得た。4月22日に屋久島町ふれあいセンターで開催された「屋久島ふるさと産業祭り」にも出展し、地域活性化に貢献した。今後も活動が継続できるよう支援していきたい。

5月



＜JA種子屋久屋久島支所果樹販売実績＞

平成29年度のJA種子屋久屋久島支所の果樹販売実績は、ぼんかん、たんかんが裏年傾向であったことや、度重なる台風襲来による落果等が発生し数量減となったことから、前年比72%の178百万円となった。今年度産は、たんかんの開花量が多く、関係機関と連携した研修会等を通じ、高品質果実生産に取り組んでいく。

＜JA種子屋久 屋久島パッション部会総会開催＞

5月2日、JA種子屋久屋久島パッション部会総会が開催され35名が出席した。昨年度の出荷数量は前年比157%の14.5 t、販売額は前年比146%の12百万円と増加した。パッションフルーツは夏季の収入源として期待されており、ぼんかん・たんかんに続く重要な果樹品目となっている。今年度はマルハナバチによる授粉作業の省力化実証に取り組んでおり、今後実績検討と波及に取り組んでいく。

＜ミカンコミバエ最終報告会＞

5月11日、屋久島事務所にてミカンコミバエ誘殺に係る対応の最終報告会が開催され、関係機関17名が出席した。昨年7月5日から8月28日にかけて10地点で12匹が誘殺され、最終誘殺から3世代相当期間を経て、初動対応が終了した。関係機関が一丸となって防除に取り組み、ミカンコミバエの定着を防ぐことができた。今後も生産者が安心して生産出荷できるよう、マニュアルに基づいて防除対応することを申し合わせた。

6月



＜肉用牛飼養管理の改善に向けた巡回指導を開始＞

町・JA・当課からなる屋久島町農林技術員連絡協議会畜産部会では、6月から規模拡大志向農家2戸を選定し、指導班による飼養管理の改善に向けた巡回指導を開始した。第1回は、子牛の発育調査や飼養環境の点検を行い、農家・関係者と改善に向けた相互検討を行った。今後は月1回の開催を計画しており、技術面だけでなくコスト削減等も考慮した経営面からの支援も行っていく。また、改善による成果については、研修会を通して地域へ波及していく。

＜6次産業化の支援方策について検討＞

6月15日、屋久島事務所会議室にて屋久島自然の恵み販売拡大協議会専門部会が開催され、農林水産課・商工観光課、漁連関係者7名が出席した。今年度は、担当者レベルでの専門部会を充実させ、総会に提案し、活動していくこととなった。協議会活動については、関係機関団体と連携を図り、それぞれの支援方策を活用しながら、活動をすすめていくこととなった。当課としては、研修会の実施や、個別ニーズに応じた相談会等支援をしていく。

＜原園芸組合夏季研修会 たんかんの連年安定生産対策や産地活性化について研修！＞

6月21日に、原地区の園芸組合夏季研修会が開催され、生産者24名を含む33名が出席した。研修会では当面の管理作業の他、農業専門普及指導員によるたんかんの連年安定生産対策や、気候変動の影響と対応、産地活性化に向けた取り組みについて研修を行った。生産者からは会が終わった後も活発な質疑があり、大変参考になる研修になったようであった。原地区は集落営農のモデル地区に位置づけており、今後も生産安定や産地活性化を支援していく。

7月



＜農村整備と連携し、水土里情報システムを活用＞

屋久島事務所農林普及課は、農業普及係、林務係、農村整備係が同じ課にあり、地域振興に向けて係間で連携を図っている。農業普及係では、農村整備係の水土里情報システムを活用し、ミカンコミバ工防除対応に係る活動の地図データ化や、果樹園の植栽品種や要改植園の状況を整理し、集落での話し合い活動や関係機関との情報共有に活用している。今後、このデータを活用して改植等果樹振興を更に推進していく。

＜和牛振興会総会にて、研修会を開催！＞

7月3日、屋久島町営農支援センターにて屋久島町和牛振興会総会が開催され、肉用牛農家16名、関係機関11名が出席した。総会では研修会も開催され、当課から「データでみる子牛生産技術」と題し、子牛市場での発育調査や販売成績の結果をもとに、子牛出荷率や飼養管理技術の改善による所得向上の研修を行った。今後も飼養管理技術・経営管理の高位平準化を支援し、市場評価の高い屋久島子牛づくりを目指す。

＜屋久島果樹部会通常総代会で「K-GAPマイスター認定書」が授与される＞

7月6日、JA種子屋久屋久島果樹部会通常総代会が開催され、生産者53名、関係機関11名が出席した。総会では、果樹部会が長年にわたりK-GAP認証を受けたことから「K-GAPマイスター認定書」の授与が行われた。平成29年度産は、裏年傾向で度重なる台風襲来もあり、ぼんかん141t、

たんかん336tと前年を下回った。意見交換では、品種更新や後継者確保対策への関心が感じられ、今後も生産者と関係機関が一体となって屋久島の果樹振興を図っていく。

<「今後の永田の果樹栽培を考える会」で集落の未来を語る>

7月11日、屋久島町永田地区で「今後の永田の果樹栽培を考える会」を開催し、生産者22名、関係機関7名が出席した。会では、ワークショップ形式で①我が家の果樹経営の現状はどうか、②今後、永田の果樹をどうしていきたいか、について意見を出し合い、人や労働力不足、老木化、廃園や病害虫の増加、経営的に厳しい等の課題が出た。今後の永田地区や屋久島町の果樹栽培をどうしていくべきか、それぞれの対策を検討し、課題解決を図っていく。

8月



<実えんどう「まめこそう」防風対策で生産安定を>

屋久島の実えんどうは、昨年から県育成品種の「まめこそう」に品種を統一して栽培をしている。農家からは、従来品種と比較して草勢が強く芯どまりが少ないと評価が高いが、季節風等で茎が折れやすいことが課題となっている。8月2日に屋久島営農管理センターで作付前の講習会が開催され、防風対策の徹底を呼びかけた。H30年産は、13名の栽培者で1.6haの面積を予定しており10月10日前後から播種を計画している。

<畜産共進会開催！みんなで育成牛管理について学ぶ>

8月3日、町営旭牧場において屋久島町畜産共進会が開催され、子牛せり市後～24か月齢未満の育成牛21頭が出品され、体型審査が行われた。現在、母牛の更新は自家保留が中心となっており、出品牛すべてが町内産であった。若干の発育のばらつきがみられたが、参加者一同で、より良い育成牛の飼養管理方法を検討した。今後も優良雌牛の確保に向け、研修会や共進会で飼養管理技術の高位平準化に取り組み、屋久島の肉用牛振興を図る。

<食品表示・GAP等について学ぶ>

8月23日、屋久島事務所において、6次産業化を志向する農業者や農産加工者を対象とした食品表示・GAP等研修会を開催し、22名の出席があった。昨年改正された新たな加工食品の原料・原産地表示制度の他、機能性表示食品・栄養成分表示について、当課からはGAPや有機認証等の概要について研修を行った。参加者からは、表示方法の確認ができた、GAPをもっと知りたいなどの感想が聞かれた。今後も必要な基礎知識を習得できる研修会を計画し、支援していきたい。

<熊毛地区茶業の将来を語り合う>

8月24日に熊毛支庁において、地区別茶業検討会が開催され、熊毛地区の生産者11名を含む計30名が出席した。本会は地域課題を検討するため、県及び県茶生産協会主催で昨年より実施されており、今回は次年度に再策定される『新「かごしま茶」産地力向上プラン（仮称）』の内容について主に検討された。意見交換では、労力確保の中でも、特に被覆作業に苦慮しており、技術改善の要望が高かった。今後も、試験研究と連携を図りながら、労力削減技術等検討していきたい。

<屋久島地区の地域食材の利用促進について検討>

8月28日、屋久島事務所において、学校給食関係者、生産者、JA、漁協、県農政課、県保健体育課等17名が参加し、屋久島地区地元食材利用促進研修会を開催した。食育・地産地消推進の状況について研修を行い、地元食材の生産状況及び学校給食センターでの地元食材の活用状況について情

報交換を行った。屋久島では野菜の食材供給が難しいことが挙げられ、供給可能な食材について検討がなされた。今後も、関係者の情報交換ができるよう支援していきたい。

9月



<食の文化祭を開催！>

9月13日、屋久島つわぶき会、生活研究グループが中心となり、尾之間保健センターで「屋久島食の文化祭」を開催し、乳幼児を含む35名が参加した。今回は、食育シニアアドバイザー外山澄子先生を迎え、「粉」を使った料理8品の調理実習と、「食育」についての講演、参加者による交流会を行った。参加者からは「粉の料理についての勉強になった。」「食育の大切がわかった。」などの感想が聞かれた。今後も食を通して農村女性の交流を支援していきたい。

<新規就農基礎研修会で農業の基礎知識を学ぶ>

9月14日、安房公民館において新規就農基礎研修会が開催され、新規就農者1名が出席して土壌肥料や農業経営・生活設計、病害虫・農薬等について学んだ。また、指導農業士と女性農業経営士より、今後の営農について助言を頂いた。新規就農者からは「質問もでき、研修内容も良く理解できた。今後もわからないことがあったら相談したい。」との感想があった。今後も関係機関や指導農業士等と一体となり、新規就農者の定着に向けた支援を行っていく。

<屋久島地区青年農業者会議で、7名がプロジェクト発表！>

9月14日、安房公民館にて屋久島地区青年農業者会議が開催され、青年農業者や指導農業士、女性農業経営士、新規就農者ら27名が出席した。茶の収量予測やかんきつの植調剤活用検討など、7名がプロジェクト発表を行い、指導農業士らからアドバイスを受けた。また、新規就農者も出席してプロジェクト活動の取り組み方を学び、会議後の情報交換会では青年同士の交流を深めることができた。

<認定農業者連絡協議会研修会を開催>

9月19日、安房公民館において認定農業者連絡協議会総会にあわせて研修会が開催され、認定農業者25名が参加した。当事務所から、青色申告のメリットや家族経営協定の締結、労災保険等について情報提供を行った。また、熊毛共済組合から、収入保険制度について情報提供があった。今後も関係機関一体となり、認定農業者の経営発展に向けた支援を行っていく。

<ようこそ屋久島へ、新規就農者3名が地域の仲間入り！>

9月19日、安房公民館において新規就農励ましの会を開催し、指導農業士、青年農業者、女性農業経営士、認定農業者、関係機関等計50名が出席し、3名の新規就農者の門出を祝った。就農者からは「色々なアドバイスを受けながら、経営を確立していきたい」等の抱負が語られた。今後、関係者一体となって、生産技術や経営の早期確立に向けた支援を行う。

<ばれいしょ作付け前講習会、次年度産面積増>

9月21日、営農支援センターにおいて農協主催のばれいしょ作付け前検討会が開催され、栽培農家13戸が参加した。平成29年度産は単収が高く契約販売で価格も比較的安定してため、平成30年度は新規栽培者や作付面積を拡大する農家が多く、前年より2.5ha多い25haの面積栽培計画で50tを見込んでいる。

10月



＜現地就農トレーナー茶部門研修と振興会秋期茶園管理研修会を合同で開催＞

10月3日に、現地就農トレーナー研修と町茶業振興会秋期茶園管理研修会を合同で開催し、生産者12名を含む18名が参加した。室内では、農業開発総合センター茶業部研究員による「チャトゲコナジラミ安定期防除」及び「水を利用した害虫防除」について研修を受け、熱心にメモを取り質疑を行っていた。現地では実証ほ場を中心に技術改善について研修した。屋久島町内の茶園は、病害虫や台風24号による潮風害被害はほとんど見られず、順調に生育している。

＜幼木管理研修会を開催！幼木の栽培管理や園内整備を研修＞

10月12日に幼木管理研修会を開催し、生産者49名が出席した。室内研修では、改植を機に園内道整備や排水対策を進め、低木化や機械導入による省力化について検討した。現地研修では、苗木の植栽方法や栽培管理を研修し、園内道整備を進めている園地を見学し、活発な意見交換がなされた。屋久島では、今年から果樹経営支援対策事業でトロイヤータんかんへの改植が始まることから、関係機関と連携して改植者のフォローを行う。

＜インターネット情報発信・販売拡大について学ぶ！＞

10月13日、屋久島事務所において、(株)楽天より講師を招き、「インターネット情報発信・販売拡大研修会」を開催し25名が出席した。研修では、インターネット販売の「環境」「システム」「ノウハウ」の3つをかけ算で考えることの重要性や、消費者心理を考慮したマーケティングについて話があった。参加者からは「最前線の情報やインターネット販売のポイントなど参考になった」という感想が聞かれた。今後も関係機関と連携し、6次産業化に関する支援を行う。

11月



＜生活研究グループ機関誌「こだま」47号を発行＞

屋久島生活研究グループ連絡協議会では、機関誌「こだま」を年1回発行しており、11月に第47号を発行した。グループ員はもちろんのこと町担当者、農林普及課職員、歴代普及指導員にも寄稿してもらっており、今回は、50周年記念号として、グループ員OBや歴代町担当者、今年屋久島を訪れた与論町生活研究グループにも寄稿してもらい、60ページを超える号となった。「こだま」の発行の継続は、グループ活動の礎となっており、今後も継続していく。

＜経営者クラブ肝属支部と交流会を開催＞

11月1～2日に、屋久島農業経営者クラブ員9名と町認定農業者連絡協議会員6名の合同で、農業経営者クラブ肝属支部との交流会を開催した。現地では、肝属支部クラブ員の養豚一貫経営と、南大隅町にてアボカド生産の取組を研修した。交流会では、肝属支部5名を含む25名が参加し、各支部の活動状況やクラブ員の経営状況など情報交換が出来た。本研修は、島外の情報を得る貴重な機会となっており、今後も継続して開催していきたい。

＜さつまいも生産対策会議を開催、つる割れ病対策の徹底を！＞

11月6日に、屋久島町営農支援センターにて、さつまいも生産対策会議を開催した。農家・2酒造メーカー等15名の参加があり、ここ数年増えている「つる割れ病」の対策を中心に検討を行い、ウィルスフリー苗の利用促進や育苗床消毒等の対策実施の申し合わせた。また、土づくりが不足して

いることも多発の要因であると考えられることから、緑肥の栽培等を併せて推進していくこととなった。

＜6次産業化個別相談会を開催＞

11月13日に、屋久島町役場等にて新規就農者で6次産業化に取り組む2経営体に対し、6次産業化プランナー2名を招き、個別相談会を開催した。今回は加工技術の相談を中心に、青年等就農計画の営農計画についても検討を行った。相談会では、基本的な加工技術研修についての要望や、工程管理表作成の必要性についてアドバイスがあったことから、今後研修を実施する予定である。

＜繁殖牛の改良を学ぶ＞

11月16日に、屋久島町肉用牛農家の農場にて、全国和牛登録協会鹿児島県支部を講師に招き繁殖牛改良研修会が開催され、農家と関係機関あわせて14名が参加した。H30県畜産共進会では、屋久島から初めての出品で若雌2区で最優秀賞を獲得しており、地域では更なる改良に向けた気運が高まっている。研修会では県共進会出品牛と比較しながら、生産素牛として優れた体型のポイントを学んだ。今後も農家・関係機関が一体となり、肉用牛産地の維持に取り組む。

＜黒葛原翁の功績を称え、「ぼんかん祭」が開催される！＞

11月20日に、屋久島町平内地区にて「ぼんかん祭」が開催され、生産者20名、関係機関10名が出席した。黒葛原兼成翁が屋久島にぼんかんを導入して今年で94年となり、屋久島ぼんかん発祥の地で式典や原木の視察、講演会等が行われた。今年度は2度の台風襲来によりぼんかんの落果や枝の折損等の被害が一部で発生したが、生産量は昨年並みを見込んでいる。ぼんかんの出荷が順調に進み、今後の産地維持に向けて生産者と関係機関が一丸となって取り組んでいく。

＜農村女性リーダーネットワーク先進地研修を開催！＞

11月20～21日、屋久島町で県農村女性リーダーネットワーク先進地研修が開催され、県内各地から74名の女性農業者が来島し、屋久島地区を含めて84名の研修会となった。研修はバス4台に分乗し、屋久島環境文化研修センターによるヤクスギランド散策や女性農業経営士である鬼塚百合子氏の6次化の取組等について研修などを行った。交流会では、各地域からの参加者による活動交換等が行われ、大盛会の有意義な研修となった。

＜屋久島生活研究グループ50周年記念大会を開催＞

11月21日、安房公民館にて屋久島生活研究グループ連絡協議会50周年記念大会を開催し、グループ員やOBをはじめ、県会長、歴代担当者、経営者クラブ、認定農業者、関係機関等74名が参加した。記念大会では、屋久島生活研究グループの50年のあゆみを振り返り、また、日置市吹上町の黒川タツ氏による講演が行われた。交流会は、グループ員の手づくり料理34品が並び、これまでお世話になった方々との懇談が行われ盛大な記念大会となった。

＜屋久島農業経営者クラブ「地域農業を語る会」を開催＞

11月21日に、屋久島農業経営者クラブ「地域農業を語る会」が開催され、クラブ員6名が参加した。屋久島町では、旧小瀬田中学校舎跡地の有効利用を目指し、水耕栽培の実証試験を行っており、流通面を含む試験結果等について研修した。町内では、気象災害や輸送リスクにより、葉物野菜の栽培は積極的に行われていないが、新しい取組に熱心に質問していた。その後は屋久島生活研究グループ連絡協議会50周年記念大会の講演会に参加し、有意義な研修となった。

＜熊毛地区茶業推進協議会でホットな話題の先進地研修を開催＞

11月29,30日に、熊毛地区茶業推進協議会先進事例研修が開催され、屋久島町から13名を含む30名が参加した。さつま町では、有機栽培・チャトゲコナジラミ安定期防除・茶とゴボウの複合経営について研修した。また、農総セ茶業部では無人摘採機や散水施設の多目的利用について研修した。屋久島町において今後導入が期待される技術等の研修内容で、非常に参考になったと好評であった。

12月



＜実えんどう「まめこそう」出荷始まる！＞

12月12日に、営農支援センターにおいて実えんどう出荷会議が開催され10名の参加があった。今年の実えんどうは、14名で1.7haの面積となっている。播種は台風の影響で10月10日からとやや遅れたが、生育は順調で、10節前後から莢が付いており年内からの出荷を計画している。

＜原園芸組合ぼんかん品評会＞

12月14日に、原園芸組合のぼんかん品評会が開催され、生産者19名が出品した。町と当課で着色や病害虫被害等の外観や、糖度等内容品質を審査した。今年は昨年より1度以上糖度が高く、食味の良い仕上がりとなっている。審査後は、出品された果実について生産者・関係機関で意見交換を行った。今後も品質向上への取り組みを支援していく。

1月



＜果樹を主体とした営農ビジョンを検討！＞

1月15日に、原公民館にて原地区園芸組合の新春研修会が開催され、剪定講習会と今年度作業部会で話し合ってきた原地区営農ビジョン（案）について検討会を行った。検討会は、世代ごとに3班に分かれ、ワークショップ形式で話し合い、時間が足りないほど活発な意見が出された。今後は、これらの意見を踏まえて、原地区営農ビジョン及び行動計画をとりまとめ、ビジョン実現に向けて支援していく。

＜屋久島つわぶき会総会開催＞

1月21日に、屋久島事務所会議室にて屋久島つわぶき会（会員は女性農業経営士等）総会が開催され、会員8名と関係者3名が出席した。事業報告や計画等の協議のほか、若手女性農業者への支援のあり方について検討された他、会員の近況報告を含め、情報交換を行った。今年度は2名の女性農業委員が女性農業経営士として認定予定であり、会員拡大が見込まれる。農林普及課では、今後も組織運営について引き続き支援していく。

＜商品性の向上に向けて、農産加工の基礎を学ぶ＞

1月24日に、屋久島町営農支援センター及びぼんたん館にて、屋久島自然の恵み販売拡大協議会主催で、6次産業化中央プランナーの本橋修二先生を講師に招き、農産加工基礎（殺菌包装）研修会を開催し、16名が参加した。会では、講義の後に加工室に移動し、実際の施設管理の視点から殺菌包装の実践まで指導があった。また、午後から25日にかけて個別相談会を行い、4件の相談を行った。今後も、商品性の向上に向けて支援を行っていく。

＜屋久島東部茶生産組合研修会及び総会が開催＞

1月29日、春牧交流館において、屋久島東部茶生産組合研修会及び総会が開催され、組合員10名を含む関係者17名が出席した。研修会では、農林普及課から病害虫防除に関する基礎知識についてスライドを用いて講義した。総会では、茶期間に口永良部島新岳が噴火した場合の対策について情報提供と意見交換を行った。

2月



＜堆肥コンクールで県知事賞を受賞！＞

2月13日、県青少年会館にて平成30年度県堆肥コンクール表彰式があり、(有)宝珠産業が県知事賞（最優秀賞）を受賞した。受賞堆肥は牛糞を主体とし生ゴミ等を添加した混合堆肥で、出品点数45点の中から、色・臭気・品質等が審査され、上位入賞を果たした。出品者は「審査結果をもとに、さらなる良質堆肥の生産に取り組みたい」と抱負を語っていた。今後も屋久島産堆肥を活用した、循環型農業の展開を支援していく。

＜簿記記帳グループの決算指導会に43名が参加＞

2月14～15日、簿記記帳グループ「屋久島町アグリネット」（会員数44名）は税理士を招いた決算指導会を開催し、43名の参加があった。会員はパソコンでの簿記記帳が多く、当課は研修会を通して、過去の記帳や決算を活用した経営改善の支援を行っており、今後も担い手の所得向上に向け指導を継続していく。

平成30年度活動体制

職 名	氏 名	担 当 業 務
農林普及課長	宮下 浩秋	課の総括
農業普及係長	蛭原 直人	係の総括, 野菜, 作物, 花き
技術専門員	木下 由香	経営, 地域営農, 食育・地産地消
技術主査	眞正 清司	茶, 土壌肥料, 有機農業
技術主査	濱上 修作	果樹, 青年農業者育成, 病害虫
農業技師	東原 大	畜産, 担い手, 新規就農者育成